

## 書 評

元木 靖著

『中国変容論 一食の基盤と環境一』

海青社 2013年6月 360頁 3,800円+税

評者は10年前の夏に中国を訪れた。日本企業の展開を見学、調査するためである。上海およびその近郊地域に限られたフィールド・ワークではあったが、急速に変化していく渦中から見たものは、どれも印象深かった。濃厚な排気ガス、行き交う車のクラクションと雑踏の騒々しさ、町から少し離れたところで見ただけの崩れかけたような瓦屋根の家屋、農村の家並みと高層ビルとのギャップ。そんな評者の驚きとは対照的に、少し年配の教員は「高度経済成長期の日本を思い出すよ」と、懐かしそうにその風景を眺めていた。

この言葉がきっかけとなって、変わりゆく現在の中国を知ることは、かつての日本、ひいては経済成長と社会の変化という、ある普遍的な現象を知ることに通じるのではないかと考えるようになった。とはいえ、中国を自分の足で歩いたのはこの時だけである。その後の10年で変化はとどまることなく、さらなる変化を重ねて現在に至っている。折にふれ、中国の留学生から現在の状況を聞きながら、大国の急速な変化を理解することは重要だとは思っていても、それが容易ではないこともわかっていて。国土が広いだけに、地域による差が大きく、変化の様相が一筋縄ではないからである。

それに対し、本書は、「食の基盤と環境」という軸を設定し、多様な地域性と変化の複雑さを「水」、「土地」、「食糧」、「環境」という4つのキーワードで整理することで、この膨大で多層的な中国の変化をとらえる1つの見方を提案し、抽象論から脱した具体的な変化の内実を示すことに成功している。まず以下に本書の構成を示し、編ごとのまとめりでその内容を見ていこう。

序

第Ⅰ編 水—長江流域における早期都市の立地と水利の環境史

第1章 長江上流域—成都平原・三星堆遺跡周辺

の灌漑水利変容—

第2章 長江中流域—滎陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容—

第3章 長江下流域—太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容

第Ⅱ編 土地—人口圧と農地開発/都市化と土地資源問題

第4章 人口と農業・土地資源関係

第5章 経済改革初期段階の土地資源問題

第6章 経済成長期の都市化と土地資源問題

第Ⅲ編 食糧—市場経済下の産業構造調整と食糧生産地域の変容—

第7章 構造調整の概念と中国農業構造調整のプロセス

第8章 中国における食糧生産構造変化の特徴

第9章 東北地区における食糧生産の地域的展開

第10章 吉林省におけるトウモロコシを主とした農業的土地利用形成の分析

第11章 黒龍江省における農業的土地利用の展開と水稲稲作発展の意義

第12章 WTO加盟前後の食糧生産地域の構造変化と課題

第Ⅳ編 環境—急速な経済成長に伴う社会の変容と地域環境問題

第13章 経済成長と低地帯の水汚染問題の生成構造—長江デルタ—

第14章 乾燥世界の地域変容と水利競合—新疆ウイグル自治区のオアシス—

第15章 農耕社会の変容と牧畜社会の草原破壊—新疆ウイグル自治区グルジャ県—

第16章 棚田世界の地域変容と貧困化問題—雲南省紅河自治州元陽県—

終章

序章では、急速に変化する中国に目を向けることは、都市化社会となった日本を考えるためにも意義あることであるという著者の問題意識とともに、3つの具体的な課題、すなわち第1に「中国全体に視野を広げること」、第2に「地域に目を向けること」、第3に最も強調したい点として「文明的な視点から捉えること」が示される。

これらの課題に対して著者は、既存研究の成果と統計資料の利用だけでなく、観察や聞き取り調査を含めたフィールド・ワークを主たる研究方法としている。本書は4編からなるが、大きく分けて「長期的な変容」を考察する第Ⅰ編と、「短期的かつ急速な変容」の考察する第Ⅱ～Ⅳ編の2つのまとまりになっている。

第Ⅰ編のテーマは「水」である。長江流域における早期都市の立地と水利の環境史と題して、長江「上流域」、「中流域」、「下流域」の都市文明を比較検討することで、流域の全体像が示される<sup>1)</sup>。第1章では成都平原・三星堆遺跡を舞台として展開した灌漑利水技術が、革命以前と以後でどのように変容するのか、「社会の動きと環境との関わりの変化の意味(29頁)」を問うている。成都平原を構成する2つの扇状地の自然条件、社会条件の差が文明の移動を生み出したという見解は興味深い。この地域の水利の目的や技術は、このような自然条件、社会条件と深く関わりながら展開したことはいうまでもない。この地域の水利の目的や技術が本質的に変化したのは、1950年代に始まった人民渠灌区水利事業以後であり、1980年代以降、成都の発展に伴う近郊農村の変化が著しくなっている。

第2章では豊陽平原を舞台として展開した稲作空間の変容が論じられる。高燥な地形であったこの地域では、先史時代にため池と用水路が誕生し、歴史時代に池沼開発と揚水技術が発達し、ダムからの導水による水利段階へ入り、現代に至る。この地域では土地の売買だけでなく、水の売買や賃貸借がみられるほど、水は極めて重要であり、その結果、独特の水利技術が発達したと著者は述べている。

第3章では下流域として太湖平原に着目している。いわゆる長江デルタ地帯である。ここでは水をコントロールするためのきめ細やかなクリークとそのネットワークが不可欠であった。「クリークは、デルタの水環境を規定する地形的な構造(枠組み)と人間活動とのかかわり合いの所産(100頁)」と著者は意味づけている。クリーク網によって人民公社時代には集団的な土地所有制の下で、多角的で集約的な農業が展開した。しかし、都市化する中国を象徴するこの地域では、1980年代には郷鎮企業が勃興し、経済開発が進むと、クリー

クが汚染され、農地の転用が進み、もはや長江デルタは食糧供給地域としての役割を果たすことができなくなったことが論じられている。

第Ⅱ編のテーマは「土地」である。とくに人口圧と都市化によって耕地がどのように変容してきたのかを追っている。第4章では人口と農業・土地資源の関係が通時的に述べられている。とりわけ1990年以降の急速な人口増加が耕地の分割・小規模化を促したことの意味は注目される。また、農村改革によって郷鎮企業が農村工業の振興を牽引したとはいえ、それは一部にすぎなかったため、地域経済の不均衡的発展が進み、かつ地域間人口流動が顕著になった。第5章は耕地の零細化と減少を法令と統計によって具体的に跡付けている。耕地減少の直接的要因として、建築ブームを背景とする煉瓦製造の拡大が挙げられる。これは著者のフィールド・ワークから導き出された発見であるだけに興味深い指摘である。

第6章では経済成長期の都市化が土地に及ぼす影響を論じている。これまで日本の近代化と農業<sup>2)</sup>、食糧生産との関係<sup>3)</sup>を論じてきた著者だからこそできる比較検討には説得力がある。アメリカ、日本、東アジアにみられた耕地の減少と自給率の低下が、中国にも見られる可能性があるということが、都市化率と耕地減少の相関分析を用いて議論されている。食糧自給率の低下は、「農業と食糧の越境化」を進めると著者はいう。次編はまさに、その問題を扱う章が集められている。

第Ⅲ編のテーマは「食糧」である。中国を一躍「世界の工場」として台頭させるきっかけとなったWTOへの加盟(2001年)以降、農業と工業の所得格差が生じ、農村経済が停滞するといった問題が表面化し、食糧生産に関わる問題が浮き彫りになった。本編では前半(第7章、第8章)でその問題を全国レベルで検討し、後半(第9章～第11章)では東北地方に焦点を当て、近年の産業構造変化が著しい長江下流域と対比する構成をとっている。中国における食糧生産をめぐる構造調整は、第1に食糧不足と生産量の増加(糧食確保の段階)、第2に新旧の方法のせめぎ合い(食糧増産の段階)、第3に食糧生産量が減少(食糧を経済手段として生活向上を目指した段階)へと進んできたと著者は言う。これにともなって、食糧生産にも構造的な変化が生じた。具体的には商品作物の

生産が伸び、穀物の生産は減少傾向がみられた。ただしトウモロコシ栽培は増加している。中国全土でみると、南方にくらべて北方での生産比重が増加し、食糧生産の中心はとくに東北部へと移っている。

そこで著者は第9章で東北地区に焦点を当て、経済改革が進む中で、従来の伝統作物を組み合わせた土地利用から、食糧作物中心の構造へと傾斜していく過程を統計数値によって跡付けている。とりわけトウモロコシを主とした生産体系は新しい現象であったため、第10章では吉林省においてその詳細を明らかにしている。さらに第11章では、「稲作の北進」というこの時期の新しい現象を、黒竜江省を事例として検討している。トウモロコシと比べて稲作は質量ともに、飛躍的な発展を遂げたとはいえないものの、今後の食糧政策の中ではさらなる変化があるかもしれないと述べられている。以上の変化をあらためて全体を俯瞰して論じた第12章では、かつては食糧供給地域であった長江デルタがもはやその役割を果たさなくなり、蔬菜に特化した農業地域へと変貌したこと、それに対して東北地区は食糧供給地域としての地位を確立しつつあることが明らかにされている。

第IV編、最後のテーマは「環境」である。水、土、食糧を通じて見えてきたのは、急速な経済発展とともに、「自然と人間の関わりは大きな転換を遂げつつある(262頁)」ということであった。本編では都市化がとくに著しい長江デルタ(第13章)だけでなく、辺境地域である新疆ウイグル自治区(第14章、第15章)、雲南省紅河自治州(第16章)が取り上げられる。長江デルタは本書の各編に登場するが、ここではとくに水質汚染を主とした環境問題の深刻化とその複合的要因が詳細なデータをもとに示される。乾燥地域である新疆ウイグル自治区では大規模な綿花栽培の開発が進み、人工オアシス地域が拡大した。しかし、この変化は水利の競争激化を招き、従来の人とオアシスの関係に大きな変化をもたらす結果となった。農耕地帯と牧畜地帯が独自の地域社会をつくり上げてきたグルジャ県では、1999年以降の「西部大開発」政策と市場経済化に伴う農業の変化によって、両者の関係にも変化がみられたことが報告されている。棚田が広くみられる雲南省紅河自治州では、商品作物栽培の浸透により、水田の茶畑や

果樹園への転用が進むとともに、水田の一部を林地に戻す「退耕還林」政策が進められている。また、棚田を目玉として観光開発が進んだ。これら一連の動きは、この地域を「貧困」から救済することを目的としていたが、一方で人と自然との関わりに大きな変化を生じさせることにもなったと筆者は指摘している。

以上、本書を读了してみて、評者は著者と共に中国全土を踏査したような感覚を覚えた。それは本書の内容が、長きにわたる著者のフィールド・ワークに裏づけられているからにほかならない。長江を上流から下流へと地域を踏査し、古代から現代へと歴史を踏査する過程では、豊富な図表や写真によって風景を思い浮かべることができ、聞き取り調査による貴重なデータから変化の内実とその深刻さを知ることができた。これが本書の最大の魅力である。

さらに本書によって示唆された重要な点として2点を挙げておきたい。第1は近代化と社会の変化を捉える複眼的視点の重要性である。長江の上・中・下流、都市と農村、北方と南方、中心と周辺、中国と日本、アジアと世界など、様々な指標で変化の多層性、地域の多様性が示されてはじめて「中国変容論」が著された意義は大きい。そうであるならば、本書が前提としている改革開放政策以後の大転換という中にも、詳細にみればさらなる変化の画期があるのかもしれない。それについては著者自身が「中国の変容はまだ緒についたばかり」と述べているように、今後の研究が期待される。

第2は「食」から地域をみるということはすなわち、地理学がこれまで蓄積してきた「水」や「土地」や「食糧」に関わる空間的理解を、「環境」や「世界経済」へとつなげて議論する可能性を多分に含んでいるということである。前著に引き続き<sup>4)</sup>、本書からその示唆を受け取り、評者自身、歴史地理学における「食」をめぐる研究の可能性を広げていきたいと考えている。その際には、「稲作を基調としてきた長期的な歴史があるアジアの変容の上に、経済と技術に過度に頼りきった今日の文明をどのように位置づけ、再評価し、めざすべき新しいアジアの姿(344頁)」を見極める努力が求められるだろう。

(湯澤規子)

注

- 1) これを発展させた内容は、第58回歴史地理学会大会シンポジウム「地域資源の歴史地理」にて「地域資源としての水をめぐる環境史—中国・長江流域の事例から—」として報告された。
- 2) 元木 靖「日本の農地—過去約100年間における変動過程の把握—」埼玉大学紀要（社会科学編）40, 1992, 15-30頁。
- 3) 元木 靖『食の環境変化—日本社会の農業的課題—』古今書院, 2006年。
- 4) 前掲3)。